

むかしむかしのずうつとむかし。ふたりの兄弟がありました。兄さんは金持ちでしたが、弟は貧乏でした。

ある年のクリスマス・イヴのこと。弟の家には、わずかばかりの肉もパンもありませんでした。そこで、兄さんのところに行つて、食べ物を少し分けてもらえないかとのみました。弟がたのみに来るのはこれが初めてではなかったので、兄さんは、いやな顔をしました。それでも、兄さんは、

「おまえが、わしのいうとおりにするなら、ベーコンをひとかたまり、丸ごとやつてもいいぞ」といいました。弟は、大喜びで、

「なんでもするよ」といいました。兄さんは、

「じゃあ、ベーコンをやるから、まっすぐ地獄へ行っちゃえ」といいました。弟は、「言つた限りは、そのとおりにするよ」といつて、ベーコンを持って出かけました。

一日じゆう歩き続けて、日が暮れるころ、弟は、ぎらぎら輝いている所に着きました。

「ここが地獄かしら」

ふと見ると、白い長いひげを生やした、とてもとても年とつたおじいさんが、納屋の所で、クリスマスのまきを割っていました。

「こんばんは」と、弟は声をかけました。

「やあ、こんばんは。こんなにおそく、どこへ行くのかね」と、おじいさんはたずねました。

「地獄へ行くところなんです。道を知っていればの話なんですけど」

弟が答えると、おじいさんは、

「そうかね。あんたは間違っちゃいないよ。ここが地獄だよ」といいました。そして、「中に入ったら、悪魔のやつらは、あんたのベーコンを売ってくれというだろう。だが、いいかい。ドアのかげに置いてあるひき臼と取りかえるのでなければ、ベーコンは売らないっていうんだ。そいつは、なんでも好きなものを引き出せるまほうのひき臼だ。ひき臼を手に入れてもどつて来たら、わしが使い方を教えてやろう。」といいました。

弟は、お札をいつて、地獄のとびらをたたきました。

中へ入っていくと、悪魔たちが、大きいのから小さいのまで、ありのようにむらがつて来て、弟に、ベーコンを売ってくれとせがみました。

弟はいいました。

「じつのところ、これは、おれとおかみさんのクリスマスのごちそうなんだ。でも、そんなに欲しがらんなら、しかたがない。むこうのドアのかげにあるひき臼と取りかえるなら、売ってやるよ」

悪魔たちは、はじめはそんな取引はいやがりました。でも、あれこれいい争つたあげく、しまいには、ひき臼とベーコンを取りかえました。

弟がひき臼を持って地獄からもどつてくると、おじいさんは、ひき臼の使い方を教え

てくれました。そして、

「これを地獄から持ってきたことは、だれにもいつてはいけないよ」といいました。弟は、お礼をいつて、大急ぎで家に向かいました。

家に帰りついたのは、クリスマス・イブの真夜中の鐘が鳴り終えた時でした。

「いったいぜんたい、どこへ行つてたんだい。長いこと待つてたんだよ。クリスマスのおかゆを煮る薪だつてないのに」と、おかみさんは、いました。弟は、

「すぐに帰つてこられなかったんだ。あつちこつち行かなくちゃならなかったんだから。でも、おまえにいい物を見せてやるよ」といつて、ひき臼をテーブルの上に置きました。

そして、ひき臼に向かつて、

「明かりを出せ」といいました。たちまち、ひき臼は、明々とかがやく明かりを出してくれました。弟は、テーブルかけや、ごちそうや、お酒など、クリスマスのお祝いにいるものを、つぎつぎといいました。弟がひとこといいさえすれば、ひき臼は、何もかも出してくれました。おかみさんは、目を丸くして、

「どこでこんなものを手に入れたんだい」とたずねました。でも、弟は答えませんでした。

さて、年が明けると、弟は、ひき臼から、食べ物やお酒など、おいしいものをどつきり出して、友だちや親せきをまねいて、大宴会を開きました。兄さんもやつて来ました。が、テーブルの上を見て、おどろき、腹を立てました。兄さんは、みんなに、

「ついクリスマス・イヴのことだ。こいつは、わしのところへ来て、ほんの少しでいいから食べ物をめぐんでくれといったんだぞ。それなのに、今は、どうだ。まるで伯爵か王さまみたいに宴会を開いている」といいました。そして、弟に、

「これはひと財産だ。どこから、こんな物を手に入れたんだ」とききました。

「ドアのかげからさ」と、弟は答えました。

けれども、夜になって、したたかよっぱらうと、弟は、秘密をかくしておけなくなってきました。そして、ひき臼を持ち出して来て、

「これだよ。これが、全部出してくれたんだ」といいました。それから、ひき臼に命じていろいろなものを出させました。

兄さんは、これを見て、ひき臼がほしくなりました。そこで、弟に、ひき臼を売ってくれと、やいやいしました。弟は、しかたなく、

「じゃあ、三百ドルで売つてあげるよ。牧場の刈り入れのころに、取りにければいいよ」といいました。

弟は、刈り入れのころまでに、ひき臼から何年分もの食べ物やお酒を出しておきました。

刈り入れのころになると、兄さんがやつて来て、ひき臼を持って帰りました。弟は、ひき臼の使い方を教えてやりませんでした。

つぎの朝、兄さんは、おかみさんに、

「おまえは、草刈り人たちといっしょに、牧場へ草を刈りに行つてくれ。わしは家に残

って昼ご飯のしたくをするよ」といいました。

お昼が近くなると、兄さんは、ひき臼をテーブルに置いていいました。

「ニシンとおかゆを出してくれ。上手に、すばやく」

すると、ひき臼は、ニシンとおかゆを出し始めました。じきに、ニシンとおかゆは、みんなのお皿にいっぱいになりました。けれども、兄さんはひき臼の止め方を知りませんでした。そこで、ニシンとおかゆは、家じゅうのなべやおけにいっぱいになりました。それでもひき臼は、出し続けて、しまいに、台所の床が、ニシンとおかゆでいっぱいになりました。

兄さんは、ひき臼を止めようと、ぐるぐる回しました。けれども、回せば回すほど、ニシンとおかゆはどんどん出てきて、あつというまに、兄さんはおぼれそうになりました。兄さんは、台所のドアを開けて、居間に逃げこみました。見るまに、居間がニシンとおかゆでいっぱいになりました。兄さんは、命からがら、玄関のドアを開けて、家の外へ飛びだしました。ところが、ニシンとおかゆは、まるで川のように、すごい勢いで兄さんの後を追いかけてきました。

いつぼう、おかみさんは、牧場で働いていましたが、いつまで待ってもお昼ご飯に呼んでくれないので、草刈り人たちに、

「そろそろ帰ったほうがいいね。台所を手伝ったほうがよさそうだ」といいました。

みんなは、ぶらぶらと、家への道を帰って行きました。ところが、丘をちよつと上ったと思うと、むこうから、ニシンとおかゆが、まるで滝のようになだれこんできました。その先頭を、兄さんが死にもぐるいで走りぬけながら、さげびました。

「ほしただけ食べてくれ。だが、おぼれるなよ」

兄さんは、まるで悪魔に追いかけられているかのように、そのまま弟の家に走りこみました。そして、

「お願いだから、ひき臼を引き取ってくれ。このままだと、一時間もしないうちに、村じゅうが、ニシンとおかゆで埋まってしまう」と、一生懸命たのみました。弟は、すぐにひき臼を止めました。そして、さらに三百ドルをもらって、ひき臼を引き取りました。

弟は、お金も引き臼も手に入れて、兄さんの家よりもっとりっぱな家を建てました。それから、ひき臼で金（きん）をひき出し、屋根を金でふきました。家は海辺にあったので、遠く海の方こうからでも、金色にきらきらかがやく家が見えました。船でそばを通る人は、みな上陸して、すてきなひき臼を見せてもらいました。ひき臼のうわさは遠くまで伝わって、知らない人はだれもないほどでした。

ある日のこと、ひとりの船長が、やって来ました。そして、

「あんたのひき臼は、塩も出すことができるかね」とたずねました。

「もちろんですとも。塩だって、何だってひき出せますよ」と、弟は答えました。すると、船長は、

「いくら払ってもいいから、ひき臼を手に入れたいのだが」といいました。それさえあれば、長い船旅のあいだじゅう、塩に不自由しなくてもすむからです。弟は、ひき臼を

手放すなんて考えられませんでした。けれども、船長が、あんまり一生懸命たのむので、しまいには承知しました。船長は、何千ドルも払わなければなりませんでした。

船長は、ひき臼を背負うと、持ち主の気の変わらないうちにと、あわてて船にもどって行きました。それで、ひき臼の使い方を教わるのをわすれてしまいました。

船長は、船をできる限りの速さで走らせました。そして、陸から十分離れた所まで来ると、ひき臼をデッキに持ち出して、いいました。

「塩を出してくれ。上手に、すばやく」

すると、ひき臼は、塩を出し始めました。塩は、さらさらと水のように流れ出ました。デッキが塩でいっぱいになると、船長は、ひき臼を止めようと思いました。けれども、止め方を知りませんでした。ひき臼は塩を出しつづけ、塩の山はどんどん高くなりました。とうとう、船は、塩の重みで、ひっくり返ってしずんでしまいました。

今でも、ひき臼は、海の底で、毎日毎日、塩を出しつづけています。だから、海の水はからいのです。

おしまい。

原話：『POPULAR TALES FROM THE NORSE』GEORGE WEBBE DASENT

再話：村上郁